

國學院大學學術情報リポジトリ

今川氏真の詠作に見える助動詞「けむ」の表す時間の把握について：「夕は秋となに思ひけむ」の解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): auxiliaryverb"kem(u)", auxiliaryverb"ram(u)", pastsimple, presentperfect, Japaneseclassicalstyleliterature 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000943

今川氏真の詠作に見える助動詞「けむ」の表す時間の把握について——「夕は秋となに思ひけむ」の解釈——

色川 大輔

キーワード：auxiliary verb "kem(u)" auxiliary verb "ram

(u)" past simple' present perfect'

Japanese classical style literature

一、はじめに

筆者はこれまで行ってきた今川氏真の詠作の助動詞「らむ」について二度稿を起こした。その中で、論すべき点の一つとして認識はしていたものの触れないで先延ばしにしてきたものに、その表す時間の問題がある。

時間の問題についてとりあえずの考えを整理するため、対象を変えて、本稿では今川氏真の詠作の助動詞「けむ」の持つ擬古文らしい定型を扱ってみることとした。

今川氏真の詠作の本文は引用文献一および三に収めるものを使用した。歌番号も底本を襲用した。

二、「何思ひけむ」型の文型について

本稿では、今川氏真の詠作の用例の中では、一種の定型句のような形になっている、疑問副詞「何」と動詞と助動詞「けむ」を連接した表現について取り扱う。これを本稿では「何思ひけむ」型」と表現する。用例は以下の六例である。全て引用文献三の収めるものである。引用文献一の収める『草庵中』には用例がなかった。

1、悔しくも何したひけむ行年の置物とては老の姿に（百首（自筆）七〇番歌。題は「年欲暮」。七三〇頁）

2、百花の色香もこゝに籠れるを菊の籬と何思ひけん(百

首〈略称、百イ〉五〇番歌。題は「籬菊」。七四一頁)

3、蘆垣の陰なき雪の朝ほらけ住あらしつと何思ひけん(百

首〈略称、百イ〉六八番歌。題は「積雪」。七四二頁)

4、あひみるはさらにかはらぬ手まぐらの夢といふ名をな
にならひけん(範英)(詠草中三三〇番歌。題は「夢逢恋」。孫

の範英の作か。七六五頁・七六六頁)

5、はし立のなかめも空にすむ月を都ならはと何おもひけ

ん(詠草中六九五番歌。題は「月前遠望」。七八二頁)

6、問へかしと何おもひけんつれくを雪に友なふ窓のし

つけさ(詠草中七五〇番歌。題は「昨日うす雪のうへに

夜の間に又ふれる」。七八四頁)

これらは、『新古今和歌集』に見える

をのこども詩をつくりて歌にあはせ侍りしに、水郷

春望といふことを

太上天皇

見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけ

む(三六番歌。引用文献七。二一七頁)

に範を取った表現であろう。この一首は、遙か後世のこと
になるが、本居宣長『新古今集美濃の家づと』(本文は引用

文献二を使用)が、

此集秋清輔朝臣の うす霧のまがきの花の朝じめり秋

は夕と誰かいひけむとある歌よりは、上御句もまさり、

又秋は夕といふは、常のことなるに、夕は秋とある

は、こよなくめづらか也。(三〇三頁。合点を省略し

た)

と賞している一首である。恐らくは、今川氏真にとつても
名歌の一つであつたのではないかと思う。

右六例の手法は、井上宗雄「今川氏とその学芸」(引用文

献三所収)の

本歌取、或いは古歌の語句を取った歌がかなり多く目
につく。いわば中世和歌の手法に則つたものである。

(六九三頁)

と評する表現の一例であると見なせよう。

更に言えば、「(新味のある)実景」(ア) + 「(実景によ

り打破された)観念」(イ) + 「引用の格助詞『と』」(ウ)

+ 「何おもひけむ」(エ) という形で、倣うことの出来る定

型文にまでもなっていたであろうことは、2・3・5の文

構造から窺える。アを上三句で述べるところまで倣ってい

る。1・6はこれを倒置した表現、4はいささか工夫をしたものと整理出来る。

一目で構造は分明であろうが、右に示したアからエまでを傍線を付して、定型を示す。

見^アわたせば山^イもとかすむ水無瀬河^ウ夕^エは秋^ニとなに思^ハひ^ケむ

百花^アの色香^イもこゝに籠^ウれるを菊^ニの籬^ハと何思^ハひ^ケむ

蘆垣^アの陰なき雪^イの朝^ウばらけ住^エあらしつと何思^ハひ^ケん

はし立^アのなかも空^イにすむ月^ウを都^エならはと何おも^ハひ^ケん

文構造が最も模倣的なのは、3であろう。

2を見れば、題は「籬菊」の語序であるところを、歌中では「菊の籬」と倒置しているところなど、本居宣長の言う「秋は夕といふは、常のことなるに、夕は秋とある」との観点を思わせ、表現効果の程は判らないが、今川氏真の古歌の学びぶりを偲ばせるものがある。

この形の表現は、他の歌人は判らないが、今川氏真においては、使い勝手の良い表現であったと推量される。

しかし、ここで「けむ」の表す時間に注目すると、その解釈が問題になりうる。今川氏真の詠作の例を論じる前に、章を改めて、この例について論じておく。

三、助動詞「けむ」の表す時間について

三・一、時間に触れるのをためらう理由について

筆者は本稿を起こすにあたり、引用文献一一（秋本守英執筆部分）の以下のような記述を以て考え、当座は助動詞「けむ」の意味概念を、通例呼び慣わされている、「過去推量」という言葉を以て呼ぼうと考えていた。

過去の事柄について、不確かであるがそうであったという意を表す。すなわち、それが実現していたことを推量したり、その状態を想像したりする意味を表す。

（二三三頁）

①過去の事柄について、それが実現したことを推量する意を表す。（二三三頁）

②過去の事柄について、その状態を推量・想像する意を表す。（二三三頁）

③過去の事柄について、そうなった原因や理由を推

量・想像する意を表す。(二三三頁)

④過去の事柄について、それが、直接に経験したことでなく伝聞したことであるという意を表す。また、そう表現することによって、直接的でない経験のように言い柔らげるのに用いる。

③で推量・想像する事柄は、上接する用言が表す事柄でなく、その用言が表す事柄が実現した原因や理由である。(二三三頁)

しかしながら、時制という観点での意味記述には、例えば引用文献一二のような疑問を呈する見方もある。

「けむ」の判断の対象となる事柄は、必ずしも過去時制とは限らない。(二五九頁)

そして、引用文献一一(小松光三執筆部分)のような、日本語には、文法的な時がない。従って、文法的な過去もない。そのことは二つの事実によって明らかである。第一は、過去の意味機能を持つ助動詞が存在しないという事実である。(一二三八頁)

第二は、時制の文法的体系が存在しないという事実である。過去は、完了の助動詞「た」を用いて表現す

る。(一二三八頁)

過去・現在・未来の表現は、文法的性格が異なる語句によって実現する。〈表現〉としては、時制は存在するが、〈文法〉としては、時制は存在しないといえよう。(一二三八頁)

しかし、実際に行われている文法論においては、表現の時制を文法の時制に取り入れて説明するということが、ごく一般に行われている。(一二三八頁)

古語では、回想の助動詞「き」「けり」「けむ」と完了の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」があつて、過去表現を実現していた。未来を表す古語「む(ん)」「べし」「じ」「まじ」などとともに、これらの助動詞は「時の助動詞」ともいわれる。完了の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」が過去表現を実現していた表現の機構は、基本的に現代語と変わりが無い。「き」は、話し手の回想という意識を含む意味機能を持つ。また、「けり」も、現前の事実を発見して詠嘆する用法があるように、過去そのものを直接表す助動詞ではない。(一二三八頁・一三九頁)

日本語には文法的時制が無いという立場では、引用文献一二の先に引いたような議論は、立論の必要も無くなる。如上のところから、疎ましく、時間に触れるのを避けてきた。しかし、今回はそうも言っていられないので、次節のように時間について考えることにした。

三・二、本稿での時間の考え方

筆者は「時制」という文法的な考え方によって助動詞「けむ」の用いられた用例の解釈を整理することについては、ある程度の効果があると考えている。本稿では、引用文献九の言うところの、「過去」と「驚嘆」という表現の区分を、用例の解釈に用いることとする。

(六) 時からいへば過去であるが其の事実が明かでない事を、想像する意を表す(七三七頁)

業平の中将のかの滝見ての帰るさに、星か河辺の螢かと、浦路遙かに眺めけむ、いづこなるらむおぼつかぬ。(盛衰記)

浦路遙かに眺めたといふのは過去であるが、其の事実が果してあつたかどうか判然しないのを、今(書く時

ではなく徳大寺実定が其処を通る時)想像したのである。之を下の何処なるらむといふ現在想像の語と比較して味はふと其の真義が捕捉出来る。(七三八頁)

けりが感嘆の意を含む過去であることは、既に述べたが、けむも感嘆の意の含まれた過去の想像と見るべきものが多い。特に次の諸例の如きは感嘆の意のみで過去の意はないようにさへ見える。

しほがまに何時か来にけむ、朝なぎに釣する海士は此処によらなむ。(伊勢)

今の世にいかでかゝる貴人ありけむとて召し出し、(宇治拾遺十二)

よそにのみきかましものを音羽川わたるとなしにみなれそめけむ。(古今)

玉緒にけるかなに通ふけむといふ一条を設けて、右のよそにのみの歌を挙げて居るのも、此の歌に過去の意が含まれて居ない様に見えるからである。此等の歌は来つらむ みなれそめつらむ といつても分るから、玉緒の説も一応は尤である。しかしよく考へると、矢張りの場合と同様に、過去に於ける認識の不足を悟

つて、驚嘆する意がある。唯違ふ所はけりの場合の悟りは確定的であるのに、けむの場合は想像的であるといふだけである。(七四一頁・七四二頁)

右に引いた区分を借用するにあたり、引用文献一三の「Past simple」や「Present perfect」の使い分けを巡る解説を借り、両者の表現の時間を規定しておく。

The choice of tense depends on whether the speaker sees something as in the past or linked to the present.

・ Past: *The car broke down yesterday.*

・ Present: *The car has broken down.*

(So it is out of action now.) (p.62)

We use the past simple for a finished time. *The car broke down* does not tell us about the present — it may be all right now, or it may be still out of action. (p.62)

The present perfect makes a link to the present. *The car has broken down* tells us that it is out of action now. (p.62)

松尾「驚嘆」の「けむ」についてだが「does not tell us

about the present — it may be all right now, or it may be still out of action now」という性格を「表現として持つ」と考える。

そして「驚嘆」の「けむ」であるが、松尾氏は「驚嘆」の「けむ」は、「つらむ」と置き換えても通じると述べている。「驚嘆」の「けむ」は、その表現する時間に、「現在完了」すなわち「Present perfect」と置換しうる性格があることになる。それは、表現の時間としては「makes a link to the present」という性質を持つものであること、本稿では考える。合わせて、「過去に於ける認識の不足を悟つて、驚嘆する意がある」ということになる。

松尾氏の「つらむ」は便宜的な表現であり、松尾氏は右の「驚嘆」の記述においてもやはり「過去に於ける」と述べている。右の区分は筆者の誤解であると批判される向きは、本稿ではそのように考えたと理解されたい。

今、筆者は「Present perfect」のつらむを「現在完了」と書いたが、これは、引用文献一五の言へ

A verb form simultaneously marked for present tense and perfect aspect, such as that in *I have eaten dinner*.

The present perfect is sometimes loosely called the 'perfect'. (p.216)

ところに留意した表現のつもりである。

推量の内容ではなく表現の時間に注目すると、「Past simple」的な性格があるのが「過去」。「Present perfect」的な性格があるのが「驚嘆」と規定出来る。松尾氏は引用文献一〇に「過去に属することは絶対である」(五一頁)と規定するが、筆者はそのようには考えないのである。

「けむ」の表現機能をこのように分類することを、今回取り上げる表現を解釈する方法とする。

四、定型句的文型の背後にある解釈上の問題

四・一、「驚嘆」の解釈

本章では、今川氏真の詠作に先立つ『新古今和歌集』三六番歌の「けむ」についての解釈を検討する。

この「けむ」を「驚嘆」の意味で解するのは、管見では比較的新しい解釈であるように感じる。参考文献八(田中裕執筆部分)の訳出に見える。

見渡せば山の麓は霞み、その中を流れゆく水無瀬川。

夕は秋に極まるなどどうして今まで思っていたのであろう。(二九頁)

右の訳出には「今まで」という連用修飾句が見えるが、これは「Present perfect」についての引用文献一四の示す

You can use the present perfect with just, already and yet (p.14)

副詞群と同様の性格を持つ副詞句である。つまり、「現在完了」的な文であると筆者は解する。

また、「今まで」「ついた」となると、正に「it is action now」ということになり、解釈の「現在完了」性が明示されている。「けむ」を「驚嘆」の意で解した訳出と考える。

この解釈ならば、自己の「認識の不足を悟つて、驚嘆」しているということになろう。「過去に於ける」とするとしても、その指す「過去」の射程は、極めて近い、肉薄した過去であり、現在と截然と分けがたい、せいぜいのところ「Present perfect」的な「過去」になろう。

四・二、「過去」の解釈

こちらは伝統的な解釈の一つである東常縁撰『新古今集

聞書』(本文は引用文献五を使用)が示す解釈である。

是は水郷春望といふ題なり。水無瀬は皇居なり。古人秋の夕はうき時といひ伝へたり。しかれども春の夕麗々と霞てそこはかとなくものしづかなる水無瀬山のありさま、世にたぐひなくあはれにも悲しくも侍り。

誰秋の夕をうしとはいひけむ、春の夕こそまさりぬれといひさしたる御哥也。風情限なし。又 うす霧のまがきの花の朝じめり秋は夕と誰かいひ劍 これは秋の夕をあはれる時といへども、朝のけしきこそ猶あはれには侍れとある哥なり。はおもしろき方なり。あはれといふこと葉心おほく侍り。(五頁)

細川幽齋の増補した増補本『新古今集聞書』(本文は引用文献六を使用)でも、原撰本の記述をそのまま引き継いでいる。そして、この原撰本の説は、北村季吟『八代集抄』にも「野州云」(引用文献四。八五頁)として、「風情限なし」(同上)までが引き継がれている。

この解では、「夕は秋」と「思」っていた動作主は、詠者自身ではなく「古人」であることになる。引用文献八(田中裕執筆部分)は、「夕は秋」の背景となる「通念」の一例

として、『枕草子』の記述を指摘する。

○ゆふべは秋 「なつかしく物のととのほることは春の夕暮こそ殊に侍りけれ」(源氏物語・若菜下)ともいうが、「秋は夕暮」(枕草子・春は曙の条)などを通念とする。↓三四〇。(二九頁)

施注者の念頭には何か具体的なものがあったのかもしれないが、右の『新古今集聞書』の記述には、「秋の夕はうき時といひ伝へたり」とする「古人」についての具体的な指摘は無い。「夕は秋となに思ひけむ」の解釈に相当するのは、「誰秋の夕をうしとはいひけむ」である。

「春の夕こそまさりぬれ」という歌人の感想は直接述べられてはおらず、「過去の認識の不足」はあるにしても「古人」の認識不足であり、歌人自身のものではない。

「けむ」の表す時間を「過去」と見ることで、この解釈は可能となる。歌人自身が「見わた」している詠歌の「現在」とは截然たる「過去」である。「Present perfect」とは性格の違うものと見ることが容易である。

歌人以外の人物(「古人」)の動作であると解することで、「けむ」の推量の「finished time」性「Past simple」性が明

瞭となり、また、「けむ」の「finished time」性「Past simple」性に着目することが「does not tell us about the present」すなわち、「present」の人物である歌人以外の人物（古人）の動作であることを示すことになる。

「過去」と解する場合、助動詞「けむ」が過去推量の意味機能を持つとされることが、この解法の妥当性を担保し、また、この解法の存在が、助動詞「けむ」の意味機能が過去推量であることを担保する、意味機能認定と解法は相互依存的なものである。

「けむ」の「過去」性に注意した、非常に「過去」らしい解釈である。

四・三、「驚嘆」と「過去」——動作主の別——

本章では今川氏真の詠作が定型のように模倣している『新古今和歌集』三六番歌について、解釈と解釈の示している時間を追ってみた。結果として、「過去」と解するもの、「驚嘆」と解するもの、いずれも存在することを確認した。いずれを取るにしても、古典語としての解釈に誤りは無いことは、引用文献九に見たとおりである。解釈としての妥

当性も、前章に見たとおりである。

ただし、「驚嘆」と見た場合、「過去」という言葉に執着するのにはやや無理があるのではないかと思える程、「現在完了」的な性格、「it is action now」の性格が強い。松尾氏は「絶対」と言うが「does not tell us about the present」とは感じられず、「Present」に密接したことを述べているように思えるため、日本語研究の立場は知らず、本稿ではこれを「past simple」と扱うことには躊躇する。

やはり「過去」と「現在完了」、「Past simple」と「Present perfect」に分けて時間を検討することには意味がある。

そして、三六番歌の表現構造の特性として、「思ふ」という動作を行う人についての解釈が、「驚嘆」と見た場合と「過去」と見た場合とで、異なることを確認した。

「驚嘆」の場合、「見わたせば山もとかすむ水無瀬河」を見ている人物が歌人本人である以上、その景観によって「認識の不足を悟つて、『春の夕こそまさりぬれと』驚嘆」したのは、歌人自身であると見なくてはならないであろう。疑われているのは歌人本人の「認識」である。

それに対して、「過去」と見た場合は、二条派流の解釈に見たように、「春の夕こそまさりぬれ」という自身の感想を背景にして「古人」の「認識」を疑った、現在と截然と切れた過去の典型と見ることが出来る。

筆者に論じる資格はないが、解釈してみた感想を述べる。

「驚嘆」の解釈には新しい美の出現に動揺する近代的な繊細な詩人の姿が、「過去」の解釈には自分の見出した美の前で「古人」の美意識に疑問を呈する、現在の景勝と受け継がれた美意識という時空の結節点に悠然と立つ古典的な詩人の姿が、見えるように感じるのである。

感想はともかく、次章では、今川氏真が「驚嘆」と「過去」、表現として「現在完了」と「過去」のいずれを取ったと見られるか、検討する。

五、今川氏真の述懐

前章で、今川氏真が表現および一首の構造まで定型のように模倣していたと見られる『新古今和歌集』三六番歌の「けむ」が、「驚嘆」と「過去」の両様の解釈を取りうること、そして、今川氏真と同時代性もある二条派の解釈が「過

去」を採用していたと見られることを述べた。本章では、今川氏真は果たしていずれの解を以て自らの詠作を行っていたのか、検討する。

今川氏真の詠作の用例は、いずれも動作主を詠者自身としていると解釈出来ることから、前章に述べたように、「Present perfect」の性質の色濃い表現になっている。

2の例で言えば、「百花の色香もこゝに籠れる」ことを発見したところから、「菊の籬と」は現在では思えなくなっている状態であると解される。そこから、「菊の籬と何思ひけむ」(どうして(私は)菊の籬だと思つ(てい)たのだろう)と、動作の原因・理由を疑う表現になっている。この例の場合、「こゝ」という指示詞、そして「籠れる」という存続の助動詞が示すように、「菊の籬と思う」動作が過去のものとなることを導いた経験に現在性が認められる。すなわち、「菊の籬と思う」動作の過去となった時点も、現在性の強い、ごく近いものである。詠歌表現の現在と、「菊の籬と」思っていた行為が完結した時点とは、極めて近接している。

3は、「住あらしつ」と完了の助動詞を用いている。これだけでも、引用の心内文に「Present perfect」的なものが

漂うことになる。

6の題は「昨日うす雪のうへに夜の間に又ふれる」である。それを見ている自身が、「問へかしと何おもひけん」と疑っている構造となり、「おも」っていたのは歌人自身になる。

いずれも、動詞の動作主は詠者自身であると解せられるところから、「驚嘆」の「けむ」であろうと考えられる。誤りではないが、前章で見た『新古今和歌集』三六番歌の二条流派解法とは異なる表現である。二条流派とは異なる解釈を以てこの歌に臨んでいたことが見える。

今川氏真の学んだ冷泉家は、新古今調に対する理解も深かったとされるので、冷泉流の歌学から発している可能性も留意しなければなるまいとは思っている。

「過去」とする手続きの一つとしては、前章に引いた東常縁式の「古人」を導入する方法があるが、その方法が有効である可能性があるのは、1である。1については、「行年の置物と」「老の姿」を思うものという通念はありそうにも思える。また、4にも可能性はあろう。

それにしても、見ていると、いずれも即事的な、述懐的

な趣が強い歌であり、「思」ったり、「なら」ったりしていたのは、いずれも歌人自身のように思われてならない。前章に述べたように、文の構造的に、自分のことを疑うと、「驚嘆」「現在完了」の色彩が強くなる。

いずれも推量の内容を示す句の中に、何らかの故事典拠があれば、一転して二条流派の解釈と一致したものとなるが、筆者に学が無いのでこれ以上のことは判らない。

六、おわりに

「けむ」の意味とされる「過去推量」の推量が、どうも「過去推量」と称すべきものと「驚嘆」と称すべきものとに分かれるようなので、本稿ではそれぞれの表現する時間を「過去」と「現在完了」とに分けて所属させ、『新古今和歌集』三六番歌および類似の表現形式を持つ今川氏真の詠作について検討してみた。結果として、筆者としては有効であったようだと考えている。本稿の扱った範囲では、「けむ」は「過去」と「現在完了」を表現対象とする助動詞であると考ええる。

そして、今川氏真の詠作では、「現在完了」的な表現が専

用されており、彼は『新古今和歌集』三六番歌をそのように解釈していたのではないかと考えた。

本稿では扱わなかった他の「けむ」の用例についても、今後考えてみたい。

【注】

用例の傍線等装飾は私に施した。引用文の字体を一部改めた。引用文の傍線等装飾は本文ママ。

【引用文献一覧】

（筆頭編著者氏名の五十音順およびアルファベット順で排列した）

- 一、井上宗雄編著『中世和歌 資料と論考』（明治書院、平成四年一〇月）
- 二、大久保正担当編集『本居宣長全集 第三卷』（筑摩書房、昭和四四年一月）
- 三、観泉寺史編纂刊行委員会編『今川氏と観泉寺』（吉川弘文館、昭和四九年十一月）
- 四、北村季吟原著『北村季吟古註釈集成37 八代集抄十三 新

古今集上』（新典社、昭和五五年四月）

五、新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成 中世古注編

1』（笠間書院、平成九年二月）

六、新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成 近世旧注編

1』（笠間書院、平成一〇年二月）

七、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第一巻 勅

撰集編 歌集』（角川書店、昭和五八年二月）

八、田中裕・赤瀬信吾校注『新日本古典文学大系11 新古今和

歌集』（岩波書店、平成四年一月）

九、松尾捨治郎『国語法論攷』（文学社、昭和一一年九月。白帝

社、昭和三六年一月追補版）

一〇、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』

（文学社、昭和一八年二月）

一一、山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』（明治書院、

平成一三年三月）

一二、和田明美『古代日本語の助動詞の研究―「む」の系統を中

心とする―』（風間書房、平成六年十二月）

一三、Eastwood, John (2008) *Oxford Learner's Pocket Grammar*, Oxford: Oxford University Press

一四、Murphy, Raymond (1985) *English Grammar in Use*,

Cambridge, Cambridge University Press : Cambridge,
Cambridge University Press, 2012.

一五' Trask, Robert Lawrence (1993) *A Dictionary of Gram-
matical Terms in Linguistics*, London : Routledge

【初校時附記】

本稿で論じるにあたり「2」として示した歌の上句「百花の色香もこゝに籠れるを」の背景について、投稿後気付いたところをここに報告しておく。『和漢朗詠集』に「菊」を題として収める以下の元稹詩摘句である(財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 第四六卷 和漢朗詠集 和漢兼作集 尚齒会和歌』〈朝日新聞社、平成一七年四月〉所収冷泉家時雨亭文庫藏安貞二年写本影印を使用した)。これによれば本稿の「ア」部の名称としては「実景」とは別の総称が必要になる。

不是花中偏愛菊此花開後更無花^元(巻上〈四六ウ・四七オ〉)。

一〇二頁・一〇三頁)

底本に黒および朱で付された片仮名傍書により付訓すると以下のとおりである。

是れ花の中に偏に菊を愛するに不。此の花開て後ち更に花
無ればなり。

この摘句が典拠かと思われるものは多くあるようである。管見に及んだ『新古今和歌集』の例を示しておく。

いまよりは又さく花もなきものをいたくなおきそ菊の上の
露(五〇九番歌。引用文献七、二二六頁)

「2」の歌にこのような典拠があるとしても、これは「何思ひけむ」の引用句についての典拠ではない。ひとまずは本稿の見方を覆すものではないが、『新古今和歌集』三六番歌と今川氏真詠との構成の相違も認められる。研究の将来性に富み、自分たちこそが学問そのものであるとおっしゃる研究者様にはそもそも取るに足りぬ話だろうが、無能の穀潰しには物珍しいので記録しておく。